

## 70年代への対話 脱皮への道

対談者 社会党書記長・江田 三郎

激動 を予感させる一九七〇年代の開幕時点に立って、社会主義の構造改革を唱える江田書記長との自由闊達なやりとり。大平は江田氏をリーダーとする野党の健全な発展を期待したが、その後、江田氏は社会党を去り、志を果たせず昭和五二年に死去。

### 抗争をやめて政策を競え

大平 いまは与党と野党の対立の中では解決できない問題が非常に多くなってきているね。平和の問題にせよ、公害の問題、物価・インフレの問題など、国民生活をどう守るかという答えは白と黒、赤と黄の対立、抗争の中からは出てこない。みんなで対処しなければならん問題については、現実をぶまえ、よりよい答案を競い合う姿が望ましい。そうありたいもんだと思うのですよ。

江田 戦後ずっと、自民党のお手本は米國、社会党のお手本はソ連という形がつづいてきたが、もうお手本がどちらにも役に立たなくなってきたところがある。保守も革新も何を打ち出し、何をよりどころにしたらいいのか。結局、自分の頭で考え出す以外にないわけで、大平さんのいう保守、革新の対立

は意味がないというのも、ある意味ではそのとおりだ。既存の価値観でにらみ合ったんでは意味がない。われわれは、われわれなりに新しいものを探さなければならんし、自民党だってそうですよ。

大平 そうそう。(うなずく)

江田 社会党は社会主義革命を考えている。しかし、実際、革命とはどういうことだろうか。(ことばを探しながら)革命でつくり出せる世の中のデッサンが描けるのかどうか。ちょっと描けなくなってきたと思うんですね。現実の一つ一つを人間の立場でどう前向きに解決していくかに重点を置かねばならなくなってきた。人類、国民のため、互いに競い合うのが七〇年代ということだろう。こんなことをいうと、改良主義者とキメつけられるがね。(笑い)

大平 日本のように経済がこれだけ不安な条件にささえられている国は世界でも珍しい。だからわれわれが繁栄を追求していくには世界のすみずみまで平和でなくては困るわけだ。マラッカ海峡を守ればとか、極東が安全であればというだけではすまされない。日本の行動を通じて平和をつくり出すことは一党一派を越えて民族の死活の問題ですよ。いままで不幸にして私の方と江田さんの方とは外交の基調もニュアンスも違っていたが、これからは既成概念を死守するのではなく、それから脱皮して、一大決心で英知を結集する必要があるのではなかるうか。野党も単に政府や中央公共団体を批判するだけではすまされなくなってきた。「こうやろうじゃないか」という構想をもった対処の仕方が必要じゃないか。

江田 野党も批判だけでなく積極的に提案しなければならん、というのはそのとおりだ。だが、今の自民党にそれを受け入れる態勢があるのかねえ。早い話、中国問題一つとってみても、接近するより離れる方向にあるんじゃないの。内外情勢調査会での川島副総裁の講演を聞くと、日中問題はあま

り論議しないようにしようという。論議しないで一体、どうしようというのか。

そういつている一方で、日米共同声明に基づき台湾、韓国に新しい借款を与えようとしている。これはいよいよ日中問題の解決をむすかしくする方向ですね。だから、われわれも少し反省しなきゃならん点もあるうが、自民党としてもよほど考え直してもらわねば……。 (口調を変えて) 僕は今後の日本にとって大国主義意識が大きな重荷になってくるのではないかと思う。大きいヤツ、力もつてるヤツはいつも相手方から恨みやねたみを買う立場にあるのだから、常に謙虚でなければならぬ。それがアジア諸国会議でカンボジア問題についてチョツカイを出したり、韓国の米軍引き揚げをめぐる借款のお荷物を背負い込んだりしている。そういう思い上がった姿勢を直すことが国内問題でも必要なんじゃないだろうか。

### 野党も座標を明確にさせよ

大平 自分のすわるイスというか、座標が決まっていけないじゃないかというご指摘はそのとおりだと思う。日本はこれまで世界政治の舞台では「お客さま」で、能動的な役割りは果たしたこともなかったし、自信もなかった。これからは、どういうイスに腰かけ、世界の問題にどういうことができるか、またはできないかをはっきりさせる時期にきていると思う。そういう点からのご批判は確かに正しい。だが、同時にだ、野党の方も注意してもらわなくちゃならぬ。つまりベトナムにしても安保論争にしても二つの誤りがあるわけです。なんだかベトナムの命運を背負い込んだような議論が多いが、それこそ思い上がりもはなはだしい。日本の座標を頭に入れて、どういうことがやれるか、やれ

ないか、ケジメをはっきりすべきではなからうか。安保にしても少しミリタリー（軍事的）な面を過大評価しているんじゃないかと思う。

江田（かぶせるように）数年前、中国の周恩来首相が「安保条約があっても日中関係の調整は可能」といったことがあるね。だから自民党としても、たとえば中国の国連加盟に努力するとか、吉田書簡をやめるとか、やる気になればできるんですよ。なんの対応策もとらないで、安保は長期堅持という。野党がオーバーだというが、なぜ可能性を追求しないのか。そこがわからんね。

大平（ことばのやりとりでね。安保の罪悪を正面からたたかれると「長期堅持」と答えるわけよ。（笑い）だからといって安保が金科玉条だと堅苦しく考えてるわけじゃない。与野党とも安保を過大評価している気味があるんでね。いい点、悪い点を正當に評価し直す必要があるんじゃないかならうか。

江田（安保、中国問題では意見の違う点があるが、大事なことはアジアをだれの目でみるかということだ。自民党は「米国の目」で見てきたんじゃないのだから。逆にわれわれも中国、ソ連のアジア観に影響されすぎたんじゃなからうか。独自の目がこれからは必要だと思っ。）

大平（大きくうなずいて）そのとおりだ。日本が今後、アジアに対してなしうることは、強大な軍事力を誇示する愚かなゲームに参加することではなく、われわれのもってる知識や技術や創造力、管理力をアジア諸国に提供する「技術国家」「知識国家」の道だ。何ができるかできないかについて与野党の政治論議にはきょう雑物が多すぎる。これをろ過していくのが七〇年代の課題じゃないかと思っ。）

江田（大平君は「座標」を決めて、できることとできないことを測定することが大事だというが、池田内閣に比べ佐藤内閣は、よけい「座標」が混乱している印象を受けるね。）

大平 いや、そうでもない。私たちの時も確たる座標でやったわけじゃない。出たとこ勝負だったよ。(笑い)いまの佐藤内閣にしても政治の基調は変わってないさ。池田内閣との間にとくに新味はないよ。

江田 新味はないが、できもせんことを(佐藤内閣は)言いすぎる。土地政策、公害、人間優先……やたらにスローガンを並べ、そしていつの間にか立ち消えている。住宅にしろ、土地にしろ大臣が代わると政策がコロツと変わる。外交問題でも安易に大国主義の姿勢をとりカベにぶつかると。あんなに、池田さんがやってたときはもつと落ち着きがあった。

大平 (ちよつとテレながら)それはむしろ政治のマナーの問題だ。(佐藤内閣が)やってることは池田内閣の延長線上にあり、安全運転をしてきている。それなりに佐藤内閣のメリットは買ってやらんといかん。

江田 ボクらからみると大臣を一年で交代させるのはいかな。就任してラツパだけ吹き鳴らして一年で消えてしまう。国内問題についてもいくつ構想が出たことか。結局なにもできない。無責任の最たるものだ。

大平 閣僚がひんばんに代わるということは、たしかに政策にしつこく食い下がり結実させるところまでいけない。これは政府・与党にとつて痛いことだ。本当は一人の総理がその任期中はベスト・メンバーを集めて果敢な政策を実行する。その間は(閣僚を)代えない。これが理想なんだが……。

池田も佐藤もそれができなかったのは残念だ。その点は江田さんのご指摘のとおりだ。

江田 土地政策なんだが、これは私有権に強い制約を加える以外にない。それをなぜやろうとしないのか。ボクはあまりイデオロギーの価値を認めないし、イデオロギーで言っているのではない。

## 「全国総合開発計画」の再評価を

大平 土地問題は大がかりな解決策が必要だ。こんどできた「全国総合開発計画」これは全体からみると土地政策だ。どうせ三百七十万平方キロしかないんだから、これをどう活用するか。太平洋ベルト地帯だけでなしに全国に拡散する。そして経済圏、文化圏、教育圏などを形成する。そのために幹線網を配備していく。もうそこまで意図的にやらんといかん。最近の人口動態をみると都市人口が減りつつあり、過疎地帯の減り方が鈍り、むしろ還流現象が出始めている。これを全国規模に広げるんだ。もう単なる「手口」だけではダメだ。その意味で「全国総合開発計画」は今までにないものだ。どうだい再評価してくれよ。(江田氏、しきりにうなずくが納得まではいかないようす)

江田 それはそうだが……。土地問題の解決は農業の近代化につながる。(政府・自民党の)減反、減産政策なんて、よくもまああんな無責任な金の使い方をするもんだ。(ひとしきり自民党の土地、農業政策を批判したのち)もちろん、われわれもイデオロギー抜きで政策と政策の勝負をしようと思っ  
ている。

大平 その方向にどれだけ大胆に進んでいけるかが社会党の命運を決めるな。(笑い)

江田 現在、野党再編成の問題が取りざたされているが、これもただ野党を算術的に合計するというのでは意味がない。しかし野党再結集の中で政治への新しい理念をガッチリ固めることができれば自民党のニューライトを刺激し、日本の政治をよくすることにつながると思う。繰り返すが算術的結集で自民党をゆさぶるうとするだけではメリットはない。いまのところ少しずつ前進を始めたとはい

えるだろう。あんたの方も、もう少し生き生きした反応をしてほしいよ。

大平 （この人には珍しく軽い口調で） どんどん出すよ。

江田 （たたみ込むように） ことしの秋ぐらいか。（笑い）

大平 うん。今の政治課題はそれをおいてないからな。（笑い）そういうことにキビキビ対応していないと自民党も生存権を……将来に向けて主張できんよ。

江田 社会党は総選挙では負けたが、最近の地方選挙、とくに首長選挙では革新系が十人も当選している。中央政治では野党が機能してないことは残念ながら現実だ。そこで野党の役割りを首長に求める傾向が出てきている。自民党が三百議席にあぐらをかいていると、世の中には意外に早く変わるよ。われわれはいまナショナル・ミニマムを作ろうとしている。各自治体は力量に応じたシビル・ミニマムを進めていく。大衆のためのフォア・ザ・ピープルでなく、大衆によるバイ・ザ・ピープルではないかん。公害対策市民会議といった新しいエネルギー、もう一つは賃金だけでなく「生きがい」を職場の中に求める職場エネルギー。こうしたものを七〇年代は生かしていきたい。

### 経済を社会福祉に生かして

大平 ボクの方も資本主義がよく、社会主義が悪いと一方的な考えはもっていない。いまの経済をいかに社会福祉に生かしていくかを考えていないと政策の立案、運営がうまくいくものではない。心情と事象とをどう組み合わせ、バランスをとっていくかは共通の課題だよ。

江田 社会主義の神さまを信仰とする時代は過ぎた。そこを変えていくべきだと長い間言ってきた

んだが……。ところで自民党内は佐藤四選をめぐる政局が動き始めたようだが……。(大平氏「きたな」といった表情)あんたが一つの「目」になつてゐるんじゃないか。どういふ動きをするんだね。ボクは四選ということは佐藤個人にとつてもいいことじゃないという気がする。

大平 まあ、そういった議論は……大体、日本人は気が早い。佐藤首相自身まだ何も言つてない。四選すべきか、すべきでないか。(新聞の)論説あたりから始めるべきだ。ところが世間は「四選があるのか、ないのか」とすぐ核心にはいつてくる。まだ早いよ。秋までには何力月もあるし、秋になったら首相が意思表示をして、それからとりかかるといふべきだよ。人の気持ちが変わらぬうちにあれこれ言ふのはマナーに反するよ。(やんわり逃げる)

江田 (やや皮肉に)表向きはね。

大平 (顔を引き締めて)表も裏もないよ。これが現実政治というものだ。社会党もこの秋は人事大会になるそうだね。(江田氏の委員長長立候補は間違いないといわれるだけに、感触をただすふう)

江田 現役員の任期が切れるんだ。物理的現象だ。(あっさりとかわす)

大平 新聞によると減量しているそうだね。

江田 ゴルフをやる暇がないので、もっぱらナワとびで……。

大平 それはいい。ボクはゴルフやつてるんだが、太り過ぎで困る。

江田 最近、小金井(ゴルフ場)でよく大平・田中会議をやつてるようだね。

大平 そのうち江田さんに減量の方法でも教えてもらつかな。